

大学の知をまちづくりに

江別市大学連携調査研究事業



北海道情報大学医療情報学科
西平 順 教授

平成23年度に「北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区」に指定されるなど、食を基盤とした地域経済の活性化を進める江別市。こうした取り組みを進めていく上で大学との連携・協力は欠かせないものとなっています。数多くある取り組みの中で、地域の皆さんにもご協力を頂いている「食の臨床試験」について、北海道情報大学の西平教授にお話を伺いました。

— 食の臨床試験とはどんなものですか —

平成21年に北海道情報大学が「食と健康と情報」をテーマとして、「食の臨床試験」を実施することを主な目的に健康情報科学研究センターを設立しました。

このセンターでは、北海道の食材の機能性（食品の効果・効能）に対する科学的評価を行うため、地域住民にボランティアとして臨床試験に参加してもらっています。食材の機能性を評価するため、参加された方に一定期間同じ食料を食べてもらい、血液などのさまざまな検査を行います。

臨床試験は食品を製造する企業

からの依頼により実施し、その結果を企業にフィードバックすることで、企業は健康に効果のある食品として付加価値を付けて売り出すことができるようになります。

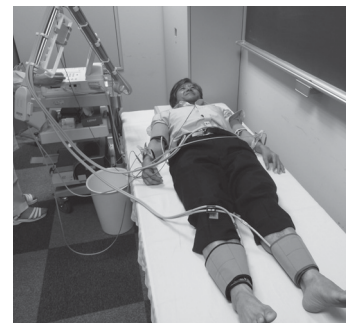
— 江別産の食材で臨床試験をしたものはありますか —

地元企業の(株)北辰フーズの依頼を受け、アスパラガスとカボチャで臨床試験を行いました。アスパラガスの擬葉（葉のような部分）を乾燥粉末にしたものには、高脂血症、高コレステロール、内臓肥満の改善に効果があり、カボチャの種子油には排尿障害、前立腺肥大に予防効果があるとの結果が出ています。どちらも普段捨ててしまふような部位ですが、健康食品として「アスパラの力」「シードオイル」という健康食品として付加価値を高め、商品化されています。

— 住民ボランティアを募る利点はなんですか —

この臨床試験は、地域住民のボランティアによって支えられています。参加者は北海道食材の応援

食を基盤とした健康都市江別～「食の臨床試験」の取り組み



動脈硬化をチェックする
脈波装置 (ABI)

団になる一方、健康診断も実施しますので自分の健康管理も同時に行えます。

現在約1700人の方にボランティアとして登録していただいています。その数も年々増加しており、平成25年には3000人を目標にしています。臨床試験に参加する方はリピーターが多いので、この取り組みが健康増進に役立つのではと思います。

— 市とはどのような関わりがありますか —

平成21年2月に市内4大学と江別市、江別商工会議所との間で包括連携・協力に関する協定が締結されました。

これを契機にまちづくりなどに関する調査研究事業や学生による自主的な地域活動に対して市から支援を受けています。この「食の臨床試験」についても、調査研究事業として財政的な支援を受けていますし、ボランティアの募集についても、自治会や市民団体へ紹介してもらするなど多方面で協力し

てもらっています。大学としても江別市民の健康増進につながればということと健康をテーマにした市民向けのセミナーなどを開催しています。

— これからの展望を聞かせてください —

江別市が「食と健康のまち」として国際的にも認められるまちになればと思っています。

江別市は「北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区」の指定を受けており、市民参加によって食材の機能性を科学的に検証する「食の臨床試験」は食の国際戦略を進める上で非常に大事な仕組みです。

私も平成23年に本学で開催された国際フードサミットなど、事あるごとに江別市の「地域を主体とした健康都市づくり」について紹介していますが、地域の皆さんと一緒に「食と健康のまちづくり」を盛り上げていけたらと思っています。皆さんもぜひ自分の健康管理のためにもボランティアに参加いただき、「健康都市江別」を一緒に盛り上げていただければうれしいです。

食の臨床試験への
ボランティア登録
はこちらへ

北海道情報大学
健康情報科学研究
センター
☎ FAX385-4430

食の臨床試験

検索



若さ・アイデア・行動力

学生パワーが地域を元気に



自分のまちは自分で守る 文京台防犯パトロール

学生たちの中には、大学で勉強するだけでなく、日頃住んでいる江別を元気にしようとして地域に飛び出す人たちがいます。「地域のまつりを盛り上げたい」、「商店街を元気にしたい」、「江別をもっとPRしたい」、「地域の役に立ちたい」…思いはさまざまですが、江別を元気にしたいという気持ちは共通しています。学生たちの柔軟な発想と行動力は時にさわやかな風となり、地域に活力と明るさを運んでいきます。

3つの大学があり、学生が多く住む文京台地区。ここでは地元の自治会と学生が協力して防犯パトロールを行っています。平成12年に始まったこの取り組みは、6月から7月にかけての2か月間、約1時間をかけて地域を見回ります。平成24年度の参加者は延べ360名（うち学生207名）。日替わりでコースを替え、空き巣、痴漢、少年の非行がないか目を光らせています。

学生で参加した酪農学園大学3年の水口さん（写真上左端）は「地方から出てきて自分が住んでいるこの地域のことをあまり知らなかったけれど、長く住んでいる自治会の方とパトロールしながらいろいろな話ができ、沢山のことを教えてもらえました。後輩たちにも続けていってほしい取り組みです。」と防犯活動以外の部分でも得るものは大きかったようです。

防犯パトロールに参加した
文京台自治会連絡協議会事務局長
千田 宏さん



パトロールをしていることが抑制につながっているのか、重大な犯罪にあつたことがないですよ。学生は素直だし、元気で活気があって楽しい。どこも高齢化が進んでいて、自治会の役員を探すのも大変。大学も地域に協力的だし、文京台にはこれだけ学生がいるのだから今後もいろんなところで協力してもらいたいです。

編集会議におじゃましました

編集部メンバーの声

えべつが大好き！！

フリーペーパー「えべんちゅ」



❁楽しいところはなんですか？
いろいろな大学や学部から集まっているので、こうした活動を通してすごく勉強になるし、成長できます。

❁江別はどんなまちになってほしいですか？
札幌に行かなくても遊べる場所や若者向けの店が増えると良いですね。そついったお店をどんどん紹介したいです。

❁どんなことを伝えたいですか？
江別を好きになってもらえるような情報を伝えるのはもちろんですが、僕たち学生も江別のために頑張るので、市民の皆さんも地元を意識して江別を盛り上げてほしいです。

❁最後に・・・今後も続けますか？
続けたいです。冗談を言いながらみんなで話しているとネタも尽きることがありません。ただ1、2年生のメンバーがいないので、一緒にやってくれる新しい仲間が増えてほしいです。

皆さんは昨年4月に創刊となった「えべんちゅ」をご存じでしょうか。江別のことが大好きな学生が集まり、学生の視点で江別の魅力を発信していこうという熱い思いのこもったフリーペーパーです。この取り組みのきっかけになったのは、昨年1月に開催された「C.O.ラボのっぽ」というイベント。市内の4大学の学生や商店街の人たちなどが集まって江別の活性化について話し合ったことがきっかけです。現在のメンバーは21名で、市内の4大学を中心に札幌の大学の学生も参加しています。2月初めに発行予定の第2号は、内容をさらに充実させ、サイズ、ページ数ともに創刊号の2倍になる予定です。



詳細 えべんちゅ編集部
E-mail : ebeben.chu@gmail.com